

感情について語るとはいかなることか？

森 秀樹 (兵庫教育大学)

私たちにとって感情は体験の対象として自明なものであり、日常的に感情について語っている。しかし、感情とは何かということになると、途端にその自明性は消滅してしまう。感情を表す語は言語によって様々であり、その分類についても意見の一致は見られない。それにもかかわらず、哲学や心理学は感情について語り続けてきた。人間は感情に左右されやすく、どのように理性の軌のもとにおくのかという言説が反復される一方で、現象学は感情を本来的な存在を開示するものとして特権化している。

本発表は、人間は、感情について語ることで、何をしていることになるのかという問いを設定する。そして、感情に関する認知科学の理論を援用しながら、人間が感情とどのような交渉関係を形成しているのかを考察することで、人間は感情について語り合う中で、言説的な世界という独自の領域を形成し、世界との関わり方を調節しているということを示したい。

全体の構成は以下の通りである。

1. 感情はどのように語られてきたか？哲学や心理学は感情について語ってきた。それらの語りは、様々であったが、同時に共通する特徴を読み取ることもできる。
2. 自由エネルギー原理は感情をどのように語るか？内的状態の時間的変容に関する推測として感情は生み出され、世界との関わり方のあり方を規定する。
3. 現象学は感情について語ることで、何をしているのか？ハイデガーは「不安」を存在の開示において特権化しているが、そのことを通して実存を人間の本質として共有化し、特異な存在様式を明確化している。

1. 感情はどのように語られてきたか？

(1) 哲学における感情

哲学は、古来より感情について主題的に語ってきた。例えば、アリストテレスによれば、「感情とは、それゆえに人々の気持ちが変わり、判断の上に差異をもたらすようになるもので、それには苦痛や快楽がつきまわっている。例えば、怒り、憐れみ、恐れ、その他この種のもの、および、これらとは反対のものがそうである」¹。感情とは何かを説明するにあたって、感情の役割を説明し、それを例示で補っている。この定義は感情とは何かを知っている人には理解されるが、それを知らない人には役立たない。

また、感情の定義のあり方は目的によって変わるとも述べている。「自然学者と問答技術者とでは、魂の諸様態のそれぞれについて定義の仕方が異なるであろう。たとえば、「怒りとは何であるか」ということについて、問答技術者は「復讐への欲求」とかそれに類したものとして定義し、自然学者は「心臓の周囲の血流のあるいは熱いものの沸騰」と定義するであろう。ところで、これらの定義のうちで後者はその素材を与えるものだが、前者の定義は形相つまり説明規定を与えている」²。弁証家による定義において欠けている「質料」は自然学者によって与えられるのだという。「心臓の周囲の血液、ないし温かいものの沸騰」であれば、怒りを知らない者でもそれを認知することができるかもしれないが、そのことで「怒り」という感情を理解しているとは言えない。さらに、感情の定義が探究される文脈を考慮に入れる必要がある。アリストテレスが感情について論じるのは、説得に役立つからである。すなわち、感情は人間のあり方を構成する重要な契機であり、いかなる行動においてもその影響を免れることはできない。そのため、アリストテレスは弁論においては感情に訴えかけることが不可欠であるとして、感情の分析を行った。

¹ アリストテレス (戸塚七郎訳) 『弁論術』(岩波書店) 1992.

² アリストテレス (中畑正志訳) 『魂について』(京都大学出版会) 2001.

ここから、①感情は定義を要しない自明なもののように思われる。②あえて、それが何かを直接指示しようとするとき、感情の質料は身体的な反応として指し示される。③そこには、さらに身体的な反応を引き起こした状況が付加される。④感情の分析には社会的な目的が組み込まれている。デカルトやスピノザといった近代の哲学者による感情の定義においても同様なことを見取ることができる³。このように、感情の定義は、その感情を生み出し、何らかの目的のために用いるという文脈の中で提示されている。感情について語ることで、感情とはまさしくそのようなものであるということが確認される。

哲学者は感情について語ってきたが、その際、感情が何であるのかを解明するよりはむしろその原因や役割に注目してきた。つまり、感情について語ることが、感情が何であるのかを解明することになると考えられてきたのである。その意味で、感情は「言説的なもの」と考えることができる。

(2) 心理学・生物学における感情

19世紀になると感情が自然科学の対象と見なされるようになった。先鞭をつけたのは生理学や生物学であったが、19世紀後半になると心理学が自然科学として自立してくる。現代に至る心理学における感情研究はおおまかに四つの類型に分類することができる⁴。

1) ダーウィン説	情動は外界に適應するために形成された機構であり、普遍的である。
2) ジェームズ説	感情は外界に対応する反応としての情動を基盤として構築され、利用される。
3) 認知説	感情は外界の認知とその評価に基づいている。
4) 社会的構築主義説	感情という機構は様々な文脈に転用され、様々な仕方で利用される。

1) **ダーウィン説** ダーウィンの『人及び動物の表情について』によれば、情動は、進化の中で形成された、生存のために有効な機能であり、生理学的な基盤をもつ。この著作では、情動は刺激に基づくある種の反応が、感情として感じられると同時に、表情として外部に現れると論じら

³ スピノザによれば、「感情とは我々の身体の活動能力を増大しあるいは減少し、促進しあるいは阻害する身体の変状〔刺激状態〕、また同時にそうした変状の観念であると解する」(第三部定義三)。ここでも、内的状態の看取が感情であると見なされている。その上で、彼は「欲望」、「喜び」、「悲しみ」を基本感情とし、他の感情はそこから派生物であるとしている。「欲望とは意識を伴った衝動であると定義することができる」(定理九備考)。しかるに、「精神は...ある無限定な持続の間、自己の有に固執しようと努め、かつこの自己の努力を意識している」(定理九)。したがって、自己の本質に固執しようとする衝動は人間の本質にほかならぬとされる。「こうして私は以下において喜びを精神がより大なる完全性へ移行する受動と解し、これに反して悲しみを精神がより小なる完全性へ移行する受動と解する」(定理一一備考)。これらを総合すると、人間はその本質からして自己の本質を成就しようとする「欲望」をもち、それがうまくいくとき「喜び」を感じ、うまくいかないとき「悲しみ」を感じるということになる。しかるに、人間は徳を求め、それがかなうとき幸福を感じる。「徳の基礎は自分自身の存在を維持しようとするコナトゥスそのものであり、また幸福は人間が自分の存在を維持することに存する」(第四部定理一八備考)。感情は人間が自分の本質を成就するための指針(喜び)であり、そのための機構(欲望)を形成するものである。しかし、人間がおかれた状況は複雑であり、人間の認識は混乱せざるをえない。小さな喜びのために大きな完全性を損なったり、大きな完全性のためには小さな悲しみを經由せねばならなかったりすることもありうる。より大きな完全性のためには、感情を制御することが必要になる。スピノザが提案しているのは、諸感情を明晰に判明に認識することであり、それらが関係している錯綜した因果を分析することである。そのことによって、より大きな完全性を欲望し、より大きな幸福に到達することが可能となる。以上、翻訳は、スピノザ(畠中尚志役)『エチカ(上)(下)』(岩波書店)1951による。

⁴ コーネリアス(齊藤勇監訳)『感情の科学』(誠信書房)1999。ただし、各分類のまとめは執筆者による。

れる⁵。ダーウィンにならって、エクマンらは、感情とその表出(表情)には、動物が環境に適応していく進化の中で形成されてきた生理学的な基盤があり、それ故、普遍性をもつと考えた⁶。

2) ジェームズ説 自然科学の唯物論傾向のもと、ダーウィンの進化論的考察や生理学に基づいて、感情の生理学的基盤が求められた。それは感情を純粹に心理的な存在者として取り扱うことに対する批判でもあった。そこから、いわゆるジェームズ・ランゲ説が生まれるのは自然なことであった。ジェームズによれば、「身体的変化は刺激を与える事実の知覚の直後に起こり、この変化の起こっているときのこれに対する感じがすなわち情動である」⁷。感覚系への外界からの刺激によって、脳はふさわしい行動が取れるように筋肉や血流を調節する。これらの内的変化ないしその感覚が情動である。ジェームズは、生理的变化を情動と区別しえないものとしている。「内部の心的状態としては情動はまったく記述しにくい。さらに、どのような感じがするかということを読者がすでに知っているのであるから、記述は不要である。情動を起こす対象に対する関係、および情動が起こす反応に対する関係のみが、書物に記載し得るすべてである」⁸。アリストテレスは情動の本質は質料において自明視され、形相においては文脈的記述としてのみ可能であると考えていたが、ジェームズは、様々な感情において、生理学的現象そのものは似通っているため、情動を区別するのに役立つのは文脈のみであるとすら言っていることになる。

ダーウィンは情動と機能とを切り離せないものと考えていた。それに対して、ジェームズは、情動が様々な場面に応用される可能性を示唆している⁹。情動は感情の基盤をなし、それなしでは感情は成立しないが、感情を区別するのは様々な文脈だということである。ここにおいて、外界の現象によって情動が惹起されるという発想を受け継ぎながらも、感情を情動にのみに還元する立場に対して批判的な視点が示されている。生物学的に生み出された機構は社会的な文脈に転用される。

3) 認知説 とはいえ、ジェームズ=ランゲ説は直ちに批判を受けた。キャノンによれば、怒りと不可分とされる生理的变化はそれ以外の情動、例えば、恐怖とも結びつきうる¹⁰。そこで、アーノルドは感覚系への刺激が怒りという情動を引き起こすためには、対象に対する評価が必要になると指摘し、感情を有益/有害への接近/離反の傾向と定義した¹¹。その後、ジェームズ説とキャノン説のいずれをも補強する論拠が集められ、感情は複数の系が関わって成立すると考えられるようになっていく。

4) 社会的構築主義説 認知説を受け入れることにより、感情は、自動的に展開する生理的過程というよりも、思考や行動によって変容する出来事であると考えられるようになる。人間は、感情の生理学的機構を進化させた自然的環境の中だけで生きているわけではない。むしろ、その後発生してきた社会などの複雑な環境の中で生活するようになっていく。高所への恐怖から飛行機を利用できないといった、感情が状況にそぐわない場面が現れる一方で、具体的な人物に向けられてきた愛が人類という抽象的な対象にまで向けられるようになるなど、原初的な感情が新しい状況に転用されたりもしている。このような感情の構築において規定的な役割を果たすのが社会的な関係である。エイヴェリルは感情を「状況に関する個人の評価であり、行動よりはパッション[受難]として解釈される暫時的な社会的役割(社会的に構築されたシンドローム)」と定義

⁵ ダーウィン(浜中浜太郎訳)『人及び動物の表情について』(岩波書店)1991。

⁶ Paul Ekman (ed.), *Darwin and Facial Expression: A Century of Research in Review*, 1972.

⁷ ジェームズ(今田寛訳)『心理学(下)』(岩波書店)1992, p.204.

⁸ Ibid. p.201.

⁹ 「本能が経験と結合すれば、その結果としての動作は非常に変形されるであろう」(ジェームズ1992, p.232)。

¹⁰ W. B. Cannon, "The interrelations of emotions as suggested by recent physiological researchers", *American Journal of Psychology*, 25, 1914. "The James-Lange theory of emotions: a critical examination and an alternative theory", *American Journal of Psychology*, 39, 1927.

¹¹ M.B. Arnold, *Emotion and Personality*, Vol.1, 1960, p.108, p.182.

している¹²。例えば、「怒りの場合、その根底にある対立は二つの規範の対立から生じる。すなわち、一方は暴力を非難し、他方は認知された不正義に対する報復を求める。この対立は第三の規範（「社会的防衛」）によって解決される。すなわち、怒りという仕方で攻撃性を表現することを認めることで、故意に他者を傷つけることが決してないようにする」¹³。感情に関する言説に身をさらし、それを受容することは、自分の状態を自分で整理できるようにするとともに、他者によって共有してもらえようとするのに役立つ。この立場からすれば、感情は普遍的なものと言うよりも、社会によって構築されるものということになる。

心理学の四つの類型は、感情の生理学的機構と機能によって整理することができる。感情を引き起こす機構が、進化の中で形成された反射的反応に限定されるのか、それとも、

	反射的現象	認知的現象
自然的環境への適応	1・2	3
社会的環境への適応	2	3・4

認知を介してより多様な現象にも対応しているのか、そして、感情の役割が、自然的環境への適応に限定されるのか、それとも、社会的環境を含む様々な状況にまで広がっているのかということが議論されている。哲学と同様に心理学においても、感情とは何かを考えるにあたって、感情の原因と機能とが語られていることが分かる。

2. 自由エネルギー原理は感情をどのように語るか？

(1) 自由エネルギー原理とは何か

感情の基本的な機能は何なのか、そして、その機能について語ることはどのような役割を果たしているのかを考えるために、本発表では Friston の「自由エネルギー原理」を援用する¹⁴。自由エネルギー原理は認知や行動の仕組みを明らかにしようとするものであり、生物がエントロピーの増大に逆らって存続し続けるという構造上の制約から導出された理論である。

物理的世界において事態 x が生じているとき、感覚 y が得られるとする。神経系はこの出来事について過去の経験に基づいて（物理的世界からどのように感覚が生成されるかに関する）生成モデル $p(x, y)$ を形成する。ただし、生物は感覚を経由してしか物理的世界を看取することができないため、外界についての知識はあくまでも確率的な推論 $q(x)$ でしかなく、生成モデルも物理的世界における生成過程そのものではありえない。これらの間の誤差は感覚や行為によって修正するよりほかない。Friston は、生物はこのような修正を自由エネルギーの最小化によって実現していると考えた¹⁵。自由エネルギーはカルバック・ライブラー情報量 (KLD) を用いて、以下のように定義される。

$$F(q, y) \equiv D_{KL}[q(x)||p(x, y)] = E_{q(x)} \left[\ln \frac{q(x)}{p(x, y)} \right] \quad (1)$$

¹² James R. Averill, “A constructivist view of emotion”, R. Plutchik, H. Kellerman (eds.), *Emotion: Theory, research and experience*, Vol. 1, 1980, p.312.

¹³ Ibid, p.333. このように考えれば、感情や内面の私秘化を社会的な要請として解釈することができるようになる。

¹⁴ Friston (乾敏郎訳)『能動的推論』(ミネルヴァ書房) 2022. 乾敏郎・阪口豊『自由エネルギー原理入門』(岩波書店) 2021. 乾敏郎『感情とはそもそも何なのか』(ミネルヴァ書房) 2018. 乾 2018 は自由エネルギー原理による感情研究の現状を概観している。ただし、本発表においては自由エネルギー原理の技術的な側面については触れることはできない。

¹⁵ ニューラルネットワークは多層からなる。自由エネルギーの最小化はそのすべての層において遂行され、全体としての自由エネルギーの最小化が実現される。

KLDは二つの確率分布の近似がうまくいっているかどうかを示すものであり、近似がうまくいっているとき、その値は0に近づく。さしあたり、この式は物理的世界に関する推論は生成過程に即したものでなくてはならないというほどのことを意味する。

まず、自由エネルギーは以下のように変形することができる。

$$F(q) = D_{KL}(q(x)||p(x|y)) + (-\ln p(y)) \quad (2)$$

物理的世界の事態に関する推論を、観測された感覚を生成モデルに適用した結果で更新することによって、自由エネルギーを下げるができる(知覚的推論)。第2項 $-\ln p(y)$ は特定の生成モデルに基づく観測値の確率分布の対数であり、(感覚)サプライズと呼ばれる。観測が完了している場合、この項は定数になる。このとき、自由エネルギーの減少は第1項の減少によるものということになり、推測が事後確率 $p(x|y)$ に近づいたということの意味する。

また、自由エネルギーは以下のように変形することもできる。

$$F(y) = -E_{q(x)} \ln(p(y|x)) + D_{KL}(q(x)||p(x)) \quad (3)$$

第2項はベイズサプライズ(Bayesian surprise)と呼ばれるが、 $q(x)$ を更新することが難しい場合、自由エネルギーを減らすには第1項を減らすしかない。それは、現在の推論を検証する感覚がえられるよう行動をすることで、尤度 $p(y|x)$ を高めるとき、実現されうる。すなわち、適切に行動することで、推論をより確かなものにするのできるのである(能動的推論)¹⁶。

しかし、行動をランダムに行うわけにはいかない。生物は将来の自由エネルギーを減少させることができるよう行動を選択するであろう。例えば、直方体が眼前にある場合、同じ場所から見よりも、見る場所を変えた方がより、推論を確証することができる。そのため、形状を知るためには、そのような行動が誘発されるであろう。このような観点から考えられたのが期待自由エネルギー(expected free energy)であり、次のように定義される。

$$G(\varphi_{t+1}, a_t) \equiv E_{q(x_{t+1}, y_{t+1}|\varphi_{t+1})} F(\varphi_{t+1}, a_t) = E_{q(x_{t+1}, y_{t+1}|\varphi_{t+1})} \left[\ln \frac{q(x_{t+1}|\varphi_{t+1})}{p_{a_t}(x_{t+1}, y_{t+1})} \right] \quad (4)$$

これは時刻 t において行動 a_t をとったときに、将来の時刻 $t+1$ において期待される推論が生成モデルにどの位近づいていると考えられるのかを示しており、仮想的行動の選択肢ごとに推論が行われる。なお、 φ_t は x_t の確率分布である。そして、複数の行動 a_t の内、期待自由エネルギーをより少なくする方が選択されることになる。ただし、その選択は物理的世界のあり方によって規定されているため、外界のパラメータとして解釈することができる。世界は期待をはらんだものとして認知され、それに応じて行動が選択される。結局、期待自由エネルギーを考えることによって、行動の選択も自由エネルギーの最小化という枠組みの中に組み込むことが可能になる。

(2) 自由エネルギー原理による感情の分析

ホメオスタシスの看取 1. において見たように、感情は環境にさらされた生物の内的状態を示すものとして考えられてきた。思い通りにならない環境にさらされた生物にとって内的環境を維持することは生存にとって不可欠なことである。動物はホメオスタシスのために自律神経系(交感神経と副交感神経との拮抗関係)を発達させた。さらに、通常の調整だけではホメオスタシスが維持できなくなるような環境変化が予想される場合には、ホメオスタシスの基準を変更して、一時的により大きな変化に対応できるような身体状態にすることも見られる(アロスタシス)。自由エネルギー原理の立場からすれば、内的状態そのものは外的状態と同様に隠れ状態であり、そのものとして知ることはできず、推論の対象である。Stephanらは脳神経系がこのような推論に基

¹⁶ 能動的推論は仮説演繹法と同じ論理構造をしている。

づいてホメオスタシスやアロスタシスを制御しているとし、推論と内受容感覚との誤差が少なく、この制御がうまくいっているとき、自己効力感 (self-efficacy) が発生するとしている¹⁷。

内的状態の時間性の看取 さらに、自己の状態の認知においては、それがどのような状態であるかということ以上に、それがどのような状態になりつつあるのが重要である。感情においては、自己の状態の時間変化が看取され、それに応じて、行動の様式を変えるということが行われている。例えば、ホメオスタシスが概ね良好であれば、行動様式を変更しないであろうし、何らかの危機が看取されれば、行動様式を変更するであろう。感情をもつ生物はこのような時間性の構造をもつことになる。Joffily らは感情を望ましい内的状態への接近／離反の推測として理解し、感情はそのような推測における自由エネルギーの時間的変化によって類型化できると考えた¹⁸。

仮想による感情の支持 生物は進化の中で自然的な環境に適応した感情を形成してきた。しかし、人間をとりまく環境は複雑化し、進化の中で形成された原初的な感情の仕組みがうまく機能しない場面も発生する¹⁹。上述の Stephan らは「使用可能なホメオスタシスやアロスタシスによる制御戦略では内受容予測誤差を減らすことができないというメタ認知的認識は、疲労という主観的感情として実体化するであろう」と述べ、それが感情障害の原因となるとしている。このように、環境との関係を反映し、それを制御する、内的状態の推測の更新がうまく機能せず、徒労感のみが募るとき、感情の認知を支えるものが求められる。さて、(4)は以下のように変形できる。

$$G(\varphi_{t+1}, a_t) = -E_{q(x_{t+1}, y_{t+1} | \varphi_{t+1})} [\ln p_{a_t}(y_{t+1} | x_{t+1})] + E_{q(x_{t+1}, y_{t+1} | \varphi_{t+1})} \left[\ln \frac{q(x_{t+1}, y_{t+1} | \varphi_{t+1})}{p_{a_t}(x_{t+1}, y_{t+1})} \right] \quad (5)$$

感覚情報によって推測を更新することができず、第 1 項を減らすのが難しい場合でも、推測を強化するような観測を重ねることで、第 2 項を減らすことは可能である。例えば、内的状態や外的状態からえられる情報だけでは推論を十分に検証できない場合でも、両者を関係づけ、状況を説明する文脈を、他者の経験によってある程度信頼できる契機として仮想することで、その推論を支えることができる²⁰。そして、必要な情報を予期しながら、情報に注意を向けること

¹⁷ Klaas E. Stephan et al. “Allostatic Self-efficacy: A Metacognitive Theory of Dyshomeostasis-Induced Fatigue and Depression”, *Frontiers in Human Neuroscience*, vol. 10, Article 550, 2016.

¹⁸ Joffily らは自由エネルギーの時間変化 $F(t)$ の微分と 2 階微分によって以下のように 7 つの感情を分類できるとしている。 $F'(t)$ が負であれば、時間的経過の中で内的状態の推測と制御ができるようになっていくということであり、その時の感情は肯定的なものである。また、推測が現在に関するものなのか、将来に関するものなのかによって、事實的／認知的が区別される。

t における感情	評価	事實的／認知的	$F'(t)$	$F''(t)$
幸福	肯定的	事實的	< 0	> 0
不幸	否定的	事實的	> 0	< 0
希望	肯定的	認知的	< 0	< 0
恐れ	否定的	認知的	> 0	> 0
驚き	中立的	事實的	0	0
安堵	肯定的	事實的	-0	< 0
失望	否定的	事實的	$+0$	> 0

Mateus Joffily, Giorgio Coricelli, “Emotional Valence and the Free-Energy Principle”, *Computational Biology*, vol. 9, Issue 6, 2013.

¹⁹ 内的状態の場合、観測の精度がもともと低く、推測の誤差の修正が効きにくいとされる。

²⁰ ある立場を設定することによって、状況の多義性 (サプライズ) を減らすことができる。その結果、予期している仮説を補強するような刺激が得られることによって、仮説が検証されるように思われてしまうということもありうる。いわゆる吊り橋効果はこのように説明することができる。D. Dutton, A. Aron, “Some evidence for tightened sexual attraction under conditions of high anxiety”, *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1974.

で、これまで見つけられないでいたことに気づき、推測（生成モデル）の精度を高めることができるかもしれない。このような仮想は期待自由エネルギーを下げるであろう。その場合、この文脈が選択され、それに合った感情が認知されることになる²¹。

行動変更のマーカー 上述のキャノンは闘争・逃走反応 (fight-or-flight response) を唱えた。怒りは怒りの対象に対する闘争を促進する役割を果たす。それに合わせて、怒りを成立させる文脈性は、闘争に対する合理的な説明をもたらし、それを正当化する。それに対して、恐れは怒りと同様な興奮状態にありながら、闘争ではなく、逃走に向かうように仕向ける役割を果たす²²。何らかの感情が選択されることによって、状況に関する推測が改善され、それにふさわしい行動が誘発される。感情は環境内での内的状態の看取にとどまらず、環境との関係のあり方の変容を促すマーカーの役割を果たすことができる。

3. 現象学は感情について語ることで何をしているのか？

ハイデガーは従来の哲学が感情をもっぱら主観的な現象としてのみ取り扱ってきたことを批判する²³。そして、感じ(Gefühl)に気分(Stimmung)や情態性(Befindlichkeit)を対置し、後者の役割を強調する。感じは外界からの影響によって引き起こされる主観的な現象であるのに対して、気分は世界への関わり方（開示性）を予め規定している様相であり、その中で存在者との関わりが可能となるとされる。

この考え方は、感情を環境との関係のあり方としてとらえる自由エネルギー原理による感情論にも通底している。感覚や知覚が対象の推論であるのに対して、感情は環境にさらされた自己の状態の推論であった。確かに、状態は、外的なものであれ、内的なものであれ、存在者的なカテゴリーにおいて認知される。その意味では、感情は内的状態の粗い認知であると言えることができる。しかし、感情の場合、内的な状態は自己と環境との関係を反映するものでもある。感情は内的状態を看取するだけでなく、自己と環境との関係の「存在様態」の看取やその転調も含まれていると考えることができる。

ハイデガーは不安という気分を存在の開示において特権的であると考えた。そして、彼は不安の独自性を際立たせるために、不安を恐れと対比している。恐れが脅威を与える内世界的な存在者に直面して起こるのに対して、不安においては、これまで慣れ親しんでいた日常性が意味を喪失し、世界が不気味なものとして迫ってくるのだという²⁴。このような不安において、現存在は日常性へと頹落していたことに直面させられる。そして、このことを契機として、現存在に固有なあり方が開示され、本来性的にある可能性が切り開かれるとされる。

ハイデガーは恐れを有害なものの接近と規定する。この考え方は伝統的なものであり、自由エネルギー原理における感情の時間性の議論とも親和的である。これに対して、不安は具体的な問題に由来するものではなく、外的状態を反映した実在的な論拠をもたないように見える。対象をもたない感情を状況に基づいて看取するとはどういうことか。また、感じられるものを不安と見なすべきなのか、それとも、一時的な機能不全と見なすべきなのかもはっきりしない。そのため、一見すると、自由エネルギー原理による内的状態の時間的変化の議論をそのまま不安に適用することはできないように思われる。

²¹ Schachter らによれば「すぐに説明がつかないような生理的興奮状態にあると、人はその状態にラベルをつけ、自分の感情を利用可能な認知の観点から説明しようとする」(S. Schachter, J. E. Singer, Cognitive, social, and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*. 69 (5), 1962)。

²² 「われわれはすべて、われわれを殺そうとするものを恐れもし、また殺そうとも欲する。これらの二つの衝動の内のどちらに従うかは、通常その特定の場合に諸事情の中のある一つの事情によって決定され、これによって動かされることが精神の高等である証拠である」(ジェームズ 1992, p.248)。

²³ Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927¹⁰, S.139.

²⁴ Ibid., S.187.

しかし、不安もまた自己と環境との関係のあり方の看取である。Paulus らによれば、不安とは観測された身体状態と推論される身体状態との誤差の検出の増大であり、自己の機能不全を示すものである²⁵。2. において、外的状態や内的状態だけではなく、両者の関係を説明し、意味づける文脈性もまた感情を規定する契機となりえ、感情が仮想的な意味づけによって支えられることを示した。不安の場合、介入することができるのであれば、それは状況の意味づけである。データの不一致として検出されているものを、状況全体の中で意味づけ直すことが必要になる。それは、不安を生み出す状況を把握する一方で、不安を、機能不全としてではなく、あり方の変更をせまるものとして解釈しなおすことに相当する。例えば、認知行動療法は、認知や行動の枠組みを吟味することで、状況との関係を改善しようとする。このように、不安を人間の構造的なあり方を吟味する契機として「改釈」することによって、自由エネルギー原理と不安とを関連づけることが可能になる。ニューラルネットワークにおいては、局所最適解へ落ち込み、勾配消失が発生することがあるが、不安をそのような局所解から抜け出すよう指示するマーカーと見なすことができる。ここに、日常的な時間性とは異なる人間に固有な時間性を見て取ることができる。

このような不安の意味づけはさしあたり仮想的なものである。仮想が現実性を帯びるためには、この解釈が遂行され環境や社会によって支えられるようになる必要がある。新たなあり方を模索するための契機として不安について語り合うことは、不安についての認知を安定化させることに寄与する。そして、不安が意味づけられることで、様々な試行錯誤が促進され、行動変容の物語が蓄積されるであろう。不安の言説は公共的に語られる必要があるのだ²⁶。このような仕方では、感情に関する公共的な言説の流通は、期待自由エネルギーをより小さくすることに寄与し、予言の自己成就のように、不安の解釈を正当化する。環境が複雑になるほど、試行錯誤は過酷になる。そのような状況の中、徒労感の海で溺れないように、不安について行動変容を促すあり方として語ることで、人間は自然な環境の中には根をもたなかった不安を言説の世界の中で現出させるのである²⁷。

生物は自然的な環境の中で感情という仕組みを形成してきた。感情は、環境にさらされた自分の状態を看取することを通して、環境との関わり方を制御する役割をもっている。ただし、人間は社会や人工物を形成し、環境を複雑化させた。そのような環境では、自然的な環境において形成された原初的な感情がうまく機能しない場面も生じる。例えば、現代において、自分を不快にさせたからといって、相手を怒りの対象と見なすことは適切ではないし、社会的不正は直接的な危害をもたらさなくとも怒りの対象とされる。感情を新たな場面に転用する試行錯誤が必要になる。このような試行錯誤を支えているのが、感情について語ることである。感情について語ることににおいて、感情が状況に関連づけられ、それがどのような役割を果たしうるのかが示される。そのような言説が語り合われることで、感情の脈絡や役割が共有化され、それに応じた社会的関係が形成される。私たちは感情について語り合うことで、高次の構築物としての感情を支え、複雑な環境との関係を試行錯誤しているのである。

²⁵ Martin P. Paulus, Murray B. Stein, "An insular view of anxiety", *Biological Psychiatry*, 60, 2006.

²⁶ ハイデガーの不安は現存在を孤立させるが、孤立したままであれば、言説は支えられない。本来的実存においても、共存在や民族が必要とされる所以である。

²⁷ 衣服や住居を、ホメオスタシスを維持する仕組みを外在化させたものと考えられる。同様に、食品を貯蔵する商店や医療を提供する病院は、アロスタシスを外在化させたものと解釈することができる。人間は自己のあり方を制御する仕組みを外在化させることで、複雑な環境における試行錯誤を容易なものにしている。本発表は感情の言説化を同様の文脈の中で理解することができることを示した。